

専 門 科 目  
( 社 会 科 学 )  
[ 90 分 ]

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。
2. 問題は全部で2問(1ページから6ページ)あるので、全ての問題を解答してください。  
ページ番号のついていない紙は下書き用紙です。
3. 解答用紙は5枚に分かれているので、すべての解答用紙の所定欄に問題番号(IまたはII)、受験番号と氏名をはっきりと記入してください。
4. 問題に問いなどがある場合は、解答欄内に問いの番号(問1など)を記入してから解答を始めてください。
5. 計算または下書きに用いる用紙が5枚、解答用紙と一緒にあります。
6. 試験中に問題冊子の印刷不明瞭、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気がついた場合は、静かに手を上げて監督員に知らせてください。
7. 試験終了後、問題冊子および下書き用紙は持ち帰ってください。
8. 設問ごとに配点が記されています。

- I 表 1 に示す利得表で表される 2 人非協力ゲームについて考える．なお，プレイヤー 1 と 2 はそれぞれ純戦略 A, B を選択可能であり，利得表内の各セル内の数値のうち，カンマの左側がプレイヤー 1 の利得を表し，右側がプレイヤー 2 の利得を表している．このとき，以下の問いに答えよ．（配点 50 点）

表 1: 2 人非協力ゲームの利得表

		2	
		A	B
1	A	1, 1	-L, G
	B	G, -L	0, 0

- 問 1  $G = 0.5$ ,  $L = 0.2$  のとき，各プレイヤーの最適反応を求め，混合戦略を含めてナッシュ均衡をすべて示せ．
- 問 2  $G = 2$ ,  $L = 1$  とする．このゲームを 2 回繰り返すときの利得表を作成し，ナッシュ均衡を混合戦略を含めてすべて求めよ．ただし，ゲームを繰り返しても利得の割引はないものとする．また，求めたナッシュ均衡のうちサブゲーム完全均衡はどれか示せ．
- 問 3  $G = 2$ ,  $L = 1$  とする．このゲームを無限回繰り返し，その際 1 回プレイするごとに利得が割引されるものとする．すなわち，利得は每期  $\delta$  倍 ( $0 < \delta < 1$ ) に減少していくものとする．プレイヤー  $i$  ( $i = 1, 2$ ) の  $t$  期目に得る利得を  $\pi_i^t$  とするとき，プレイヤー  $i$  の平均利得  $x_i$  を  $\delta$  と  $\pi_i^t$  を使って表すと， $x_i = (1 - \delta) \sum_{t=1}^{\infty} \delta^{t-1} \cdot \pi_i^t$  となる．なぜなら，まず毎期の利得の合計は

$$\pi_i^1 + \delta \cdot \pi_i^2 + \delta^2 \cdot \pi_i^3 + \cdots = \sum_{t=1}^{\infty} \delta^{t-1} \cdot \pi_i^t$$

であり，平均利得  $x_i$  を毎回得るときの利得の合計は無等比級数の和によって

$$x_i + \delta \cdot x_i + \delta^2 \cdot x_i + \cdots = \frac{x_i}{1 - \delta}$$

と表され，この 2 つが等しくなければならないからである．

ここで，ゲームの 1 回目は純戦略 A を選び，それ以降は前回一度でも相手が純戦略 B を選んだならそれ以降無限に純戦略 B を選びつづけ，そうでなければ純戦略 A を選ぶ繰り返しゲームの戦略（トリガー戦略）を考える．プレイヤー 2 がこのト

リガー戦略にしているとき，プレイヤー 1 がこのトリガー戦略にしたがった場合のプレイヤー 1 の平均利得と，プレイヤー 1 が 1 回目から無限に純戦略 B を選び続ける繰り返しゲームの戦略にしたがった場合のプレイヤー 1 の平均利得をそれぞれ求め，前者の平均利得の方が後者より大きくなるためには  $\delta$  はどのような値でなければならないか示せ．

II 〈資料1〉と〈資料2〉は、バングラデシュにおけるグラミン銀行のマイクロクレジット活動の今後の展望に関する、創設者のユヌス総裁による自伝からの抜粋である。

グラミン銀行方式は世界大で拡大・定着しつつあり、わが国においても、最近になって無担保個人融資を行う金融機関が現れるなど、マイクロクレジットに似た融資方式や個人・小規模企業の起業促進のための投資活動に対する注目が集まっている。マイクロクレジット方式には多くの論点が含まれるであろうが、それは資本主義経済システムの今後にとってどのような意義をもつと考えるべきなのだろうか。またマイクロクレジット方式の今後の課題としては、どのようなことが考えられるだろうか。

〈資料1〉は訳者による解説であり、〈資料2〉はユヌス自身の文章（『自伝』最終章）である。両者を読み、以下の三つの問いから一つを選択して答えよ。（配点 50 点）

問1 発展途上諸国と先進諸国との間に横たわる極端な経済格差のみならず、ストリート・ピープルなど先進国の中にも存在する貧困問題も、なお大きな社会問題であり続けている。これまでの経済学・社会科学が世界の貧困問題の解決に失敗してきたことは否めないが、ユヌスの理論が世界的な成功を収めつつあるのはなぜなのか、既存理論との相違点を中心にあなたの考えを述べよ。

問2 ユヌスは、グラミン銀行方式が世界的に普及し貧困がなくなれば、国家や自治体の社会保障プログラム等が不必要になると述べているが、国家・行政サービスの必要性問題に関しては、「市場か国家か、どちらがそれを提供すべきか」をめぐる長く争われてきた議論がある。その問題をめぐるユヌスの主張に関して検討を加えよ。

問3 先進諸国での類似事例としては、例えば大都市スラム街居住者や貧困マイノリティ層に対する貸し付け、各種の起業支援制度などが行われているが、先進諸国でのマイクロクレジット方式の拡大・発展の度合いは発展途上諸国とは異なって必ずしも高くないようである。今後、わが国でマイクロクレジット方式を適用・拡大していくことは可能だろうか？ その際には、どのような問題点および留意点があると考えられるだろうか？ わが国固有の金融システムの構造や問題点を踏まえ、検討を加えよ。

〈資料1〉

「銀行」の仕事として一般的に考えられるのは、人々から預金を募り、それを必要としている人に融資し、利子を取る、というようなことだろう。ところが、この本に書かれているバングラデシュのグラミン銀行は、そんな私たちの固定観念を打ち破る、稀な存在の銀行である。

グラミン銀行が普通の銀行と違うのは、たとえばこんな点だ。

- (1) 担保となる資産や土地のない人（特に女性）を対象にして、資金を貸し付けている。
- (2) 一般の銀行では融資対象にならないような、数十ドルから数百ドル程度の、ごく少額の資金から貸し付けてくれる。
- (3) 融資を受けたい人が銀行に出向くのではなく、銀行員が借り手たちのところに直接出向いて行って融資をする。

そして、グラミン銀行が他の銀行と最も大きく違うのは、この銀行が、借り手たちの生活水準を向上させ、世界から貧困をなくすことを最大の目的としている点だ！「貧者の銀行」グラミン銀行がそう呼び習わされているのは、そのためなのである。

この本は、そのグラミン銀行の創始者、ムハマド・ユヌスの自伝である。

チッタゴン大学経済学部の教授だったユヌスは、自分が学び、教えてきた経済学が、貧困にまみれる祖国バングラデシュを救うのに役立っていないことにいらだちを感じていた。そこで机上の学問を捨てたユヌスは、大学の近隣にある村をリサーチして歩き、それまでの経済学の理論とは正反対の、全く新しい方法論を編み出した。担保になる資産を持たない貧困層の人々に対し、ごくわずかの資金を低利で貸し付ければ、その資金を元手に彼らは経済的な自立を果たし、生活レベルを向上させることができる、というものだ。

理論だけ聞くと「まさか、そんなことが」と思う方が多いだろうと思う。しかし、その夢物語のようなユヌスの実験は成功した。ユヌスはグラミン銀行を設立し、彼の始めた無担保少額融資の実験は、現在では「マイクロクレジット」という名で世界各国に広まっている。開発途上国はもちろん、アメリカ、フランス、北欧などの先進国においても、その国にいる貧しい人々の生活向上のために、この活動が広まっている（略）

グラミン銀行が素晴らしいのは、貧しい「女性」に着目した点だと思う。特にアジアでは女性の地位は欧米諸国に比べればはるかに低い。日本でも、女性が銀行から融資を受けようとすれば大変な困難が待ち受けている（略）

斬新なアイデアを持っていても、元手がないために挫折している女性たちが、日本にも大勢いる。もし日本にもグラミン銀行のように、女性がビジネスを起こすための融資をしてくれる銀行があれば、もっと多くのユニークな女性の力が発揮される世の中に

なるはずだ。日本でもマイクロクレジットの潜在的な需要がある。そのことに気づいた人たちの手で、実際に日本でも、女性支援のためのプログラムがいくつか始まっている。そういったプログラムが広まれば、日本女性の経済的、社会的な地位はもっと高まることだろう。

〈資料2〉

私は、貧困のない世界というのは、あらゆる人が生活に最低限必要なものを自分で手に入れる能力を持つ世の中を意味するのだと考えている。そんな世界では、飢えて死んだり、栄養失調に悩まされる人は誰もいないはずだ。これは世界の指導者たちが何十年もの間唱え続けている目標だが、これまで、それを実現するための手段が講じられることは決してなかった。

今日、四万人の子どもたちが世界中で毎日死んでいる。飢えからくる病気のためだ。貧困のない世界では、こうしたことが原因で死ぬ子どもはいないはずである。

貧困のない世界が実現すれば、地球上のあらゆる場所にいるすべての人間が、教育や健康管理サービスを利用できるようになるはずだ。すべての人間に、そうするだけの余裕が生まれているだろうからだ。今日とは違って、国家は健康管理や学校に関して補助金を出したり、ただで提供するように求められることもない。

貧しい人々に対して無料の、もしくは補助金を使ったサービスを提供するために作られたあらゆる国の組織は、もはや必要なくなるし、廃止されるだろう。さらに、福祉は必要なくなり、地方自治体や国の福祉担当部局も要らなくなる。施しも必要なくなり、炊出し所（スープ・キッチン）も、配給のスタンプも、授業料のない学校も、無料の救急車も、通りで物乞いをすることも、すべてが不要になる。

慈善事業に頼って生きる人が誰もいなくなるから、国家によって運営される安全ネット的なプログラムは存在理由がなくなってしまう。国家による社会保障プログラムや収入補助プログラムも不要になるだろう。

貧困のない世界の社会構造は、もちろん、現在の貧困に悩まされている世界とはきわめて異なるものになるに違いない。誰か他の人に哀れみを感じる人は誰もいないだろう。そしてそのことこそ、貧困のない世界と、貧困に悩まされている世界との違いを作り出しているのだ。

そして最後に、貧困のない世界は、経済的にも今の状態よりずっと強固で、はるかに安定しているに違いない。

今日、ひどい貧困生活を強いられている世界の五分の一の人々は、収入を得て、収入を使う人になるだろう。彼らは市場に新たな需要を生み出し、世界経済を成長させるこ

とだろう。彼らは創造性と斬新さを市場にもたらし、世界の生産能力を増大させることだろう。

一時的あるいは限られた場合を除いて、誰も貧しくなくなったなら、経済は極端な変動を起こさなくなるだろう。私たちは好況と不況の周期的サイクルを避け、より簡単に、人間によって生み出されるその災厄を克服することができるようになるだろう。

しかし、すべての人間が自分自身と家族の面倒をみるのに十分な収入が得られる貧困のない世界でも、突然の大惨事や災難、ビジネス上の失敗を原因とする破産や困窮、あるいは個人的な病気や自然災害などのせいで、一時的な貧困状態になることはありうる。

貧困のない世界においても、洪水、火災、サイクロン、暴動、地震といった、よく起こる災害で家族や地域、あるいはその地方全体が壊滅的な打撃を受ける可能性はある。しかし、そういった一時的な問題は市場のメカニズムで救済することができるはずだ。社会意識によって動かされる企業による保険など他の自己支払いプログラムが支援に動くことになるだろう。

(『ムハマド・ユヌス自伝 - 貧困なき世界をめざす銀行家』早川書房、1998年、より)

問題は、このページで終りである。

解答冊子  
専門科目  
(社会科学)

氏名

受験番号

博士(前期)専門科目 解答用紙 (1)

科目名

社会科学

問題番号

点

博士(前期)専門科目  
社会科学(1)

(枠内に解答を書くこと)

氏名

受験番号

博士(前期)専門科目 解答用紙 (2)

科目名

社会科学

問題番号

点

博士(前期)専門科目  
社会科学(2)

(枠内に解答を書くこと)

氏名

受験番号

博士(前期)専門科目 解答用紙 (3)

科目名

社会科学

問題番号

点

博士(前期)専門科目  
社会科学(3)

(枠内に解答を書くこと)

氏名

受験番号

博士(前期)専門科目 解答用紙 (4)

科目名

社会科学

問題番号

点

博士(前期)専門科目  
社会科学(4)

(枠内に解答を書くこと)

氏名

受験番号

博士(前期)専門科目 解答用紙 (5)

科目名

社会科学

問題番号

点

博士(前期)専門科目  
社会科学(5)

(枠内に解答を書くこと)

[計算用紙/下書き用紙]

[計算用紙/下書き用紙]

[計算用紙/下書き用紙]

[計算用紙/下書き用紙]

[計算用紙/下書き用紙]